



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第141回演奏会

The New Symphony Orchestra the 141st Concert

《ベルリン芸術週間参加記念演奏会》

芸術文化振興基金助成公演

藤田 正典

オーケストラのための「輪廻」

[新交響楽団委嘱作品・日本初演]

FUJITA Masanori: "Samsara" for Orchestra, 1993

伊福部 昭

オーケストラとマリムバの為の

「ラウダ・コンチェルタータ」

IFUKUBE Akira: "Lauda Concertata" for Orchestra and Marimba, 1976

マリンバ独奏: 安倍 圭子

ABE Keiko, marimba solo

チャイコフスキー

交響曲第5番 短調 作品64

Petr Ilych TCHAIKOVSKY: Symphony No.5 in e minor Op.64, 1888

指揮

石井 眞木

ISHII Maki, conductor

体育の日

1993年10月10日(日・祝)2:00pm.

東京芸術劇場

Sunday, October 10, 1993 at Tokyo Geijutsu Gekijo (Ikebukuro sta. west exit)

*おそれいりますが未就学児のご入場はお断りさせていただきます。

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第141回演奏会

The New Symphony Orchestra The 141th Concert

《ベルリン芸術週間参加記念演奏会》



指揮：石井 眞木

ISHII Maki, conductor



藤田 正典：オーケストラのための「輪廻」

FUJITA Masanori : "Samsara" for Orchestra, 1993

[新交響楽団委嘱作品・日本初演]

伊福部 昭：オーケストラとマリムバの為の「ラウダ・コンチェルタータ」

IFUKUBE Akira : "Lauda Concertata" for Orchestra and Marimba, 1976

マリimba独奏：安倍圭子

ABE Keiko, marimba solo

——— 休 憩 ———
intermission

チャイコフスキー：交響曲 第5番 ホ短調 作品64

Petr Ilych TCHAIKOVSKY : Symphony No.5 in e minor Op.64, 1888

第1楽章 *Andante — Allegro con anima*

第2楽章 *Andante cantabile, con alcuna licenza*

第3楽章 *VALSE : Allegro moderato*

第4楽章 *FINALE : Andante maestoso — Allegro vivace*

1993年10月10日(日・祝) 2:00p.m. 東京芸術劇場大ホール

Sunday, October 10, 1993 at Tokyo Geijutsu Gekijo



芸術文化振興基金助成公演

(財)東洋信託文化財団助成公演

主催：新交響楽団

ごあいさつ

本日は新交響楽団の〈ベルリン芸術週間参加記念演奏会〉にご来場いただき、誠にありがとうございます。

前回のプログラムや音楽雑誌等ですすでにご紹介いたしました通り、私ども新交響楽団は9月7日、ベルリン芸術週間の一環として同事務局からの招待を受け、石井眞木氏の指揮のもとベルリン・フィルハーモニー大ホールにて演奏会を行いました。

プログラムは現代を代表する日本人作曲家3名―石井眞木、伊福部昭、藤田正典の3氏の作品で構成され、独奏にはマリンバの安倍圭子、打楽器の山口恭範の両氏およびベルリン・パーカッション・アンサンブルを迎え、好評のうちに演奏会を終えることができましたことをここにご報告いたします。その反響の大きさは、2日後の9月9日付で6つの一般紙がこの演奏会をかなりのスペースを割いて取り上げたことでも明らかと思われます（本プログラム別頁参照）。

＊

ここでぜひとも強調しておかなければならないことは、このベルリン演奏会の成功は、今年1月の第137回演奏会以来お寄せいただきました数多くの個人、法人、団体の皆様からのご厚志に込められた暖かい応援によるところが大きかったことです。

またベルリンで準備万端整えて私どもを迎えて下さった芸術週間事務局の皆様をはじめ、大型楽器を快く貸していただいた方々、いろいろと面倒なことをお引き受けいただいた多くの方々により、無事演奏会を終えることができました。

新交響楽団はこれら数多くの方々からのご協力と暖かい励ましに対し、心より御礼を申し上げますとともに、今後とも新交響楽団の使命として、邦人作品を積極的に取り上げ、常に新鮮な企画によって日本のオーケストラ界にささやかながら独自の地位を占めたいと念願、努力してまいります。

なお、ご寄付・ご協力をいただいた方々のお名前は別頁に掲載させていただきました。

改めて多くの方々に心からお礼を申し上げ、略儀ながらご挨拶とさせていただきます。

1993年10月10日

新交響楽団運営委員長
ベルリン演奏旅行団長

福島 龍二



写真：山崎慎一郎

新響のベルリンでの成果

〈正確さとヴィルトゥオーゾ〉 —— そして、なぜチャイコフスキーか ——

石井 眞木

9月7日にベルリン芸術週間のコンサートで「新響」が登場した。それも、カラヤン全盛時代に建てられた通称〈カラヤン・サーカス〉と呼ばれるベルリン・フィルの本拠地「フィルハーモニー・ホール」でであった。今年の主要なテーマが「日本」であったことにもよるが、このコンサートは、43回の歴史をもつヨーロッパ有数のフェスティバルにNHK交響楽団と共に参加した最初の日本のオーケストラという名誉と、全作品が日本の現代作品であるという画期的な内容をもっていた。西洋音楽の牙城で、日本の交響楽団の日本作品のみによる、密かな〈挑戦〉という意味をもったコンサートだったのである。

新響はここで、ジェットレック（時差病）にもめげず、実に立派な演奏をくりひろげた。私の個人的レヴェルでのドイツ人たちの評判は上々であったが、翌々日の6つのベルリンの日刊紙が、大々的にこの演奏会を取り上げた（これからもまだ2～3の新聞批評がでるはずである）ことも、コンサートの成功を物語っていた。いくら東京とは違うベルリンとはいえ、ある日本の有名なオーケストラが〈西洋作品〉でベルリンに客演した時には、2つしか批評がでなかったことを考えれば、この反響はたいした評価である。これらの批評の内容、観点はさまざまであったが、全体的に好評と言えるもので、新響について、〈精緻な演奏〉とか、〈ヴィルトゥオーゾ〉という言葉があちこちに見られた。〈成せば成る〉という言葉が浮かぶが、このベルリンの演奏には、新響は胸をはって良いと思う。名人芸的な安倍圭子さんのマリンバも、多くの人たちが瞠目した山口恭範さんの独奏とシデロイホス（鉄の打楽器）、さらに、「浮游する風」で打楽器の底力をみせたベルリン・パーカッションの面々も新響を大きく支援したことは言うまでもない。これらの総合の成果、快挙だったともいえよう。新作初演の作曲家の藤田正典さん、伊福部昭先生に対しても、恥ずかしくない演奏だっ

たと思う。むろん私の作品も前年の初演を大きく上回る満足のいく演奏をしてくれた。ブラヴォー、新響！

さて今回の第141回演奏会は、《ベルリン芸術週間参加記念演奏会》と銘うたれており、ベルリン公演の成果を日本の皆様に聴いていただく演奏会である。但し、実に残念なことだが、拙作の「浮游する風」は演奏されない。既に昨年この作品が新響の演奏会で演奏されたから、が一つの理由であるが、この作品の重要なくかなめである打楽器群のベルリン・パーカッションの来日が不可能なことにもよる。したがって、山口さんの迫真の独奏を聴くことはできない。

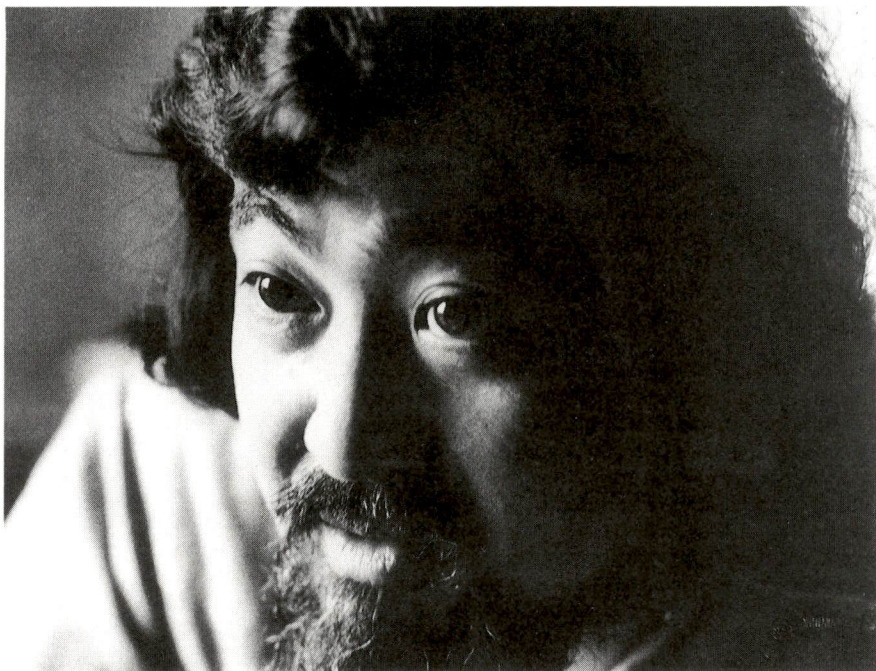
では、この「浮游する風」のかわりに何を演奏すべきか。さまざまな作品が候補となり、議論は伯仲したが、結論的にいえば、今年の没後100年を記念してチャイコフスキーの「第5交響曲」を取りあげることにした。少々奇異な選曲に感じられる方もいらっしゃると思うが、これには一つの意味合いがある。実は、百年以上の〈時差〉はあるとしても、チャイコフスキーと、現代の日本の作曲家の立場にはある共通点がある。それは〈音楽の中央〉への作曲上の挑戦である。周知のように、このロシアの作曲家は、当時、ヨーロッパ中央の影響の強い〈西欧派〉と、ロシア音楽を根底とすべき〈民族派〉との葛藤から名曲を生んだが、日本の現代の作曲家も〈西洋音楽〉と〈日本の伝統音楽〉の狭間で、新しい作曲様式を模索する宿命を負っている。この近似性からチャイコフスキーにはある種の共感を覚えるのである。「浮游する風」のベルリンでの名演をご披露できないのは心残りだが、かわってチャイコフスキーの「第5交響曲」を指揮することは、作曲上の〈音楽の中央への挑戦〉という共通項をふまえた、私のチャイコフスキー作品への共感と顕顕である。

（ベルリンにて／1993年9月11日）

●指揮

石井 眞木

ISHII Maki, Conductor



石井眞木は日本を代表する国際的な活躍をしている作曲家である。

1936年近代舞踊の草分け舞踊家石井漠の三男として東京に生まれた石井眞木は、東京において作曲、指揮、ピアノ、ヴァイオリン等、初期の勉強を終えた後1958年渡独、ベルリン音楽大学作曲科に入学、同校を卒業した1961年まで4年間にわたる留学生活を送った。在学中に「現代音楽のためのダルムシュタット夏期講座」(西独)はじめ、いくつかの国際現代音楽祭で初期の作品が演奏され、注目された。

1962年帰国後は、東京を中心に活発な作曲活動を行う。1969年、ベルリン市の「芸術家プログラム」の招きで再渡独して以来、現在までベルリンー東京の二都を本拠に、作曲家、指揮者、フェスティバルのオルガナイザーとして精力的な活動をしている。この間、日本の主要オーケストラをはじめ、ベルリン・フィル、パリ管、フィラデルフィア管、ボストン響、スイスロマンダ管等、世界各地の交響楽団で石井作品が演奏されている。また「パリの秋フェスティバル」(1978)、「ベルリン芸術週間」(1981)、「ジュネーヴの夏フェスティバル」(1983)、

「ベルリン市制750年記念コンサート」(1987)、「作曲家の個展 '89・石井眞木」(サントリー音楽財団／1989)、「石井眞木作品集」(第303回東京都交響楽団定期公演／1990)などで、〈石井眞木特集〉のコンサートが開催されている。

また、指揮者としては1979年新日本フィルハーモニー交響楽団に客演指揮者として迎えられて以来、スイスロマンダ管弦楽団、ベルリン放送交響楽団などに客演している。

最近では1988年と1993年に自作の二幕もののバレエ「輝夜姫」(振付：イリー・キリアン／ネザーランド・ダンスシアター)をデン・ハーグ、アムステルダム、ロッテルダム(以上オランダ)、エッセン(ドイツ)、パリ、東京、大阪などで60回以上にわたり指揮し、大きな成功をおさめた。

主な受賞歴は、「ドイツ大使賞」(1963)、「イタリア賞／ヴェネチア市賞」(1973)、「尾高賞」(1977)、「芸術祭優秀賞」(1968、73、78、80)、「中島健蔵音楽賞・最優秀賞」(1985)、「ドイツ批評家賞」(1988)、「プラハの春・特別賞」(1990)、「京都音楽賞・大賞」(1990)など。

藤田 正典：オーケストラのための「輪廻」(新交響楽団委嘱作品)

FUJITA Masanori: "Samsara" for Orchestra

作曲者・藤田正典は1946年生まれ。日本に初めて「12音技法」を導入した先駆者である作曲家、故入野義朗に師事し、70年に行われた「日独現代音楽祭・東京」の作曲コンクールで第1位を獲得して作曲家としてデビューした。同年西ベルリン市の奨学金を得てベルリン音楽大学作曲科に入学、4年間伊桑に師事した。

75年にはスイス国際作曲家コンクールに入賞、キュンストラハウス・ボスヴィルに3カ月間招待される。同年日本に帰国後は次々に作品を発表、作曲家として活動し、高い評価を得ている。

82年第1回入野賞を獲得、同賞の委嘱を受けて「ピアノとオーケストラのためのオーロラIV」を作曲、小澤征爾指揮、木村かをり独奏、新日本フィルハーモニー交響楽団で初演されて大きな注目を集めた。この作品は83年、ニューヨークのカーネギーホールでガンサー・シュラー指揮、木村かをり独奏、アメリカン・シンフォニー・オーケストラで再演され好評を得た。85年にはベルリン芸術家プログラム(DAAD)の招待で再渡独している。

作風は、作曲技法的には、非常に精選された音群による独特な宇宙観をもったものだが、作品の内容には仏教的なものが多い。本日演奏される「輪廻(サムサーラ)」について作曲者は次のように述べている。

*

「私の新作“Samsara”は、空海(774~835)がその

著書の中で「輪廻」について述べていることに深い感動を覚えつつ作曲した。空海は、——だれでも人は好んで生まれず、死もまた何人もこれを憎む。だが尚、生まれかわり生まれかわって迷いの世界(地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道)をめぐり、いくたびも死をくりかえしてはあらゆる迷いの世界に沈んでいる。過去をふりかえれば、暗くして、その初めを見ることができず、未来をのぞみ見れば、まったく不明でその終わりを知らない——と述べている。私自身、六道(迷いの世界)からの脱却を希求する者であるが、遠い彼方だとしても、菩提(悟り)の境地へたどり着けるのであろうか。私の新作には、このような心境が反映しているはずである」

*

この曲は1993年9月に新交響楽団がベルリン芸術週間に参加するのを機に団が新作を委嘱、9月7日にベルリンのフィルハーモニー大ホールにて初演が行われた。

作曲年代：1993年

初演：1993年9月7日(上述参照)

楽器編成：フルート3(3番はピッコロ持替)、オーボエ2、コールアングレ、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器(I番奏者=トライアングル3、吊シンバル3、タムタム3、シンバル、テナードラム II番奏者=トライアングル3、吊シンバル3、タムタム3、小太鼓、テナードラム、大太鼓、ヴィブラフォン III番奏者=トライアングル2、吊シンバル3、タムタム3、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、マリンバ)、ピアノ、弦5部

団員募集！

新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。音楽監督の故芥川也寸志氏が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動していくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一度練習をご覧ください。いつでも歓迎です。団費：入団費3,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後6~9

時、東京文化会館他にて。

なお、新響では次のパートの奏者を重点的に募集いたしております。入団に際してはオーディションがあります。詳細は下記斎藤までお問い合わせ下さい。

- ・重点募集パート……ヴィオラ、チェロ、コントラバス、オーボエ、トランペット
- ・連絡先……斎藤茂樹 ☎043(287)3388

伊福部 昭：オーケストラとマリムバの為のラウダ・コンチェルタータ

IFUKUBE Akira ; "Lauda Concertata" for Orchestra and Marimba

この作品は1976年に作曲され、79年の9月12日、新星日本交響楽団の創立10周年記念作品として山田一雄の指揮、安倍圭子のマリムバ独奏で初演された。その後80年4月に新交響楽団が「日本の交響作品展－4 伊福部昭」で芥川也寸志指揮・安倍圭子独奏により、また84年にも新響が第102回演奏会で同じ顔ぶれにより再演した。新響にとっては本日がベルリン演奏会に続いて4回目の演奏となる。

＊

曲は単一楽章形式で書かれている。「アダージョ・レリジョーソ(宗教的な・敬虔な)」で始まり、衝撃的なマリムバの登場のあとしばらくして「アレグロ・ペザンテ・ポコ・バルバロ(いくらか粗野に)」の延々と続く8分音符のリズムに乗ってマリムバが舞う。中間部はアンダンテで、滔々たる大河のようなスケールの大きな音楽。マリムバの低音の魅力が遺憾なく発揮される部分でもある。そのあと再びカデンツァを経てトムトムとともにアレグロ。ここからマリムバは絢爛たる織物のような律動でオーケストラとともに最後まで息をつかせず駆け抜ける。

作曲者はこの作品に次のような言葉を寄せている。

「ラウダ・コンチェルタータとは、司伴奏風な頌歌と言う程の意ですが、この作品では、マリムバとオーケストラとの協奏の形がとられています。

ゆるやかな頌歌風な楽案は主としてオーケストラが受け持ち、マリムバは、その本来の姿である打楽器的な、時に、野蠻にも近い取扱いがなされています。

この互いに異なる二つの要素を組み合わせること、言わば、祈りと蠻性との共存を通じて、始原的な人間性の喚起を試みたものです」

＊

本日でこの曲は国内外ですでに48回目！という安倍さんにお話をうかがった。

「大変な曲です。従来のマリムバの曲にはない、プリミティヴなエネルギーを徹底して追求した、とてもユニークな作品だと思います。」「リズム楽器とし

てのマリムバ」を前面に出している。オーケストラの方も、伴奏というより共演しながら両者がこの曲の持つ「生命のうた」をうたいあげていく。そこに私はいつも大きな喜びを感じています。

この曲は手が速く動くとか、そんな上っ面で弾いているだけではだめです。魂を込めて、一つ一つの音を充実させなければいけない。そしてこのスケールの大きな曲の本当に息の長いフレーズが持続できるだけのエネルギーが必要です。

初演から14年が経ちましたが、自分の中でつねに育ってきている「ラウダ」を意識します。だから以前に新響さんと演奏した時とは変わっていると思いますよ。これだけ骨の太い、肉厚な音楽をマリムバでどこまで追求できるか、ということスコアを見て考えながら、いつも新しい試みをしています。先日ベルリンの演奏ともまた違った演奏になると思います」

＊

ベルリン・フィルハーモニー・ホールでの、お客さんの人数の3倍はあろうかという大きな拍手とブラボーが忘れられない。

作曲年代：1976年

初 演：1979年9月12日(上述参照)

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、コールアングレ、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、キューバン・ティンパレス、トムトム3、ハーブ、独奏マリムバ、弦5部

作曲者の伊福部昭は1914(大正3)年北海道生まれ。35年北海道帝国大学林学科卒。独学で作曲を学び、35年には初の管弦楽作品「日本狂詩曲(次回94年1月29日の第142回演奏会で演奏)」でチェレプニン賞を受賞した。この時の審査員はルーセル、オネゲル、イベールなどのそうそうたる顔ぶれで、満場一致での1位決定であったという。その後は林務官として僻地で生活する一方、北海道先住民族の旋律を取り入れるなど独自の作風を生み出した。戦後は東京芸大で7年間教鞭をとり、芥川也寸志、黛敏郎、矢代秋雄など時代の先駆をなす作曲家たちを育てて

いる。

また映画音楽も数多く手がけており、一連の「ゴジラ」シリーズなどを通じて一般にもなじみ深い作曲家。新交響楽団でも80年の「伊福部昭個展」をはじめ、これまでに多くの演奏会で取り上げている。現在は東京音楽大学学長。

*

本日の「ラウダ・コンチェルタータ」は、伊福部氏が来年80歳の「傘寿」を迎えるにあたっての記念シリーズの第1回目で、新交響楽団では今後5回にわたって同氏の作品を毎回取り上げる予定。

今尾 恵介（打楽器）

●マリンバ独奏

安倍 圭子

ABE Keiko, marimba solo



日本を代表する国際的マリンバ奏者。演奏活動は世界30カ国に及ぶ。ソリストとしてオーケストラや室内楽、打楽器合奏団やジャズ奏者との協演など、幅広いユニークなレパートリーで、国際的に高い評価を受けている。新たな奏法の開拓、意欲的なオリジナル作品づくりにより、マリンバを独奏楽器として確立させ、独自の芸術性の高いマリンバの世界を築いた音楽史上に残るアーティストとして世界各地で絶賛され、確固たる評価を得ている。

- ・芸術祭賞6回受賞。1968年、69年、71年、74年、76年、89年（レコードも含む）。
- ・1968年より、オリジナル作品によるコンサート活動を開始。

- ・1981年より毎年、欧米コンサートツアーを行う。
- ・1987年より国内コンサートツアーも開始。
- ・1977年より世界の60校に及ぶ音楽大学で指導。
- ・1985年より国際打楽器芸術協会のボードディレクターに選出される。

発売されているCD、レコードは15枚、また委嘱初演した作品は50曲以上におよぶ。自らの作品も含めてこれらは世界中で演奏され、好評を得ている。

出演した主な音楽祭は、ヘルシンキ・フェスティバル、ベルリン・パーカッション・フェスティヴァル、ウィーン・サマーフェスティバル他多数にのぼる。

現在桐朋学園大学教授、相愛大学講師、ユトレヒト音楽大学（オランダ）客員教授。

チャイコフスキー：交響曲第5番 作品64

Petr Ilych TCHAIKOVSKY : Symphony No.5 in e minor Op.64, 1888

チャイコフスキーほど多くの人たちに親しまれている作曲家はいないだろう。交響曲第4番・第5番・第6番をはじめ、バレエ音楽「白鳥の湖」「眠りの森の美女」「くるみ割り人形」、祝典序曲「1812年」、幻想序曲「ロメオとジュリエット」、イタリア奇想曲、ピアノ協奏曲第1番、ヴァイオリン協奏曲など、毎日のように世界のどこかで彼の作品が演奏されているのである。

今回のベルリン演奏旅行中の9月6日（新響の演奏会の前日）に聴いた、クラウディオ・アバド指揮ベルリン・フィルでもメイン・プログラムが交響曲第6番〈悲愴〉であったが、この時の割れんばかりの拍手は、アバドの人気、ベルリン・フィルのオハコ曲としての演奏の見事さとともに、チャイコフスキーが聴衆を十分に満足させるに値する人気作家であることの証しと言える。

ではなぜ、それほどまでに彼の作品が親しまれているのであろうか。

まず、「おいしい」旋律がたくさん出てくることである。これは吹いている金管奏者にとっても当然おいしくて、他の作曲家の作品ならホルン以外の金管楽器は多くの場合、一発パンと音を出して何十小節も休符を数えなければならないか、打楽器のようにとても旋律とは思えないようなリズムを打っているだけであったりするところを、この曲では、「締めるべきところは締める」のはもちろんのこと、第1楽章のコラールのように感傷的な旋律や、第4楽章のように雄大で荘麗な旋律もある。いわば、1曲で何度もおいしいのである。奏者だけおいしいのではもちろん困るけれど。

また、次々と現れる旋律がまた魅力的だ。交響曲第5番は、ベートーヴェンの第5番と同様に、作曲家自身の手記によれば、この曲は彼の「運命交響曲」であり、冒頭のクラリネットに代表される「運命の動機」と呼ばれる主題が全楽章で繰り返して現れるこ

とも重要な特徴である。曲中の目立った旋律の大部分は「運命の動機」の変奏であり、ひとつの素材から多くの旋律を生み出した、メロディー・メイカーとしての彼の天才を強く印象づけるものである。

さらに、第2楽章が優美で叙情的であることはチェリビダッケの演奏時間の長さがこれを証明しているし、交響曲の通例として、スケルツォの入るべき第3楽章にワルツを取り入れているのは、作曲者の新機軸である。事実、交響曲の中にワルツの楽章を置いた例は、他にはベルリオーズの幻想交響曲ぐらいだ。これは、当時のヨーロッパで、社交舞踏の音楽として、ワルツが流行していたことの影響だろうか。

＊

チャイコフスキーは1840年5月7日カムスコ・ヴォトキンスクという鉱山町に生まれ、1893年11月6日ベテルブルクで生涯を閉じた。3年前には生誕150年にちなんだ数多くの演奏会や遺品などを集めた展覧会が開かれたが、今年は没後100年にあたり、それを記念する演奏会が再び各地で催されている。常に注目され続けている作曲家で、そもそも演奏回数が多いから、「記念演奏会」と銘打ってもあまり目立たないぐらいである。

この曲は、1883年8月26日に完成、同年11月7日に作曲家の指揮によりベテルブルクで初演され、ハンブルク・フィルハーモニー協会会長のテオドール・アヴェ・ラレメントに献呈された。

島丸 睦美（トランペット）

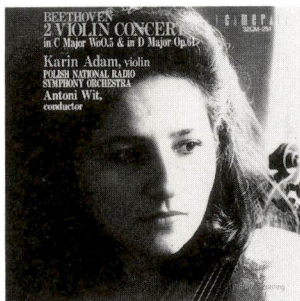
楽器編成：フルート3（3番はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

またひとつ美しい音、カメラータから。

絶好調カリン・アダムの最新録音!ベートーヴェン不滅の名作に加えて、
知られざるハ長調コンチェルトがCD初登場。

カリン・アダム

ベートーヴェン/ヴァイオリン協奏曲全集



●ベートーヴェン
ヴァイオリン協奏曲ハ長調W00.5
ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品61
カリン・アダム
ヴァイオリンIIアンデラス・ガルオリ1686
アントニー・ウィット指揮
ポーランド国立放送交響楽団
[CD] 32CM251 ¥3,008(税込)
★デジタル録音1992年5月、カトヴィツ

絶賛発売中

大輪カリン・アダムの華ひらいた名盤。



カリン・アダム ブラームス&シベリウス/ヴァイオリン協奏曲

●シベリウス
ヴァイオリン協奏曲ニ短調作品47
●ブラームス
ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品77
カリン・アダム(ヴァイオリン)
アントニー・ウィット指揮 ポーランド国立放送交響楽団
[CD]32CM-219 ¥3,008(税込)
★デジタル録音:1991年5月、カトヴィツ
絶賛発売中

腹郁たる美音で集成された哀愁のメロディー。



カリン・アダム チャイコフスキー/ヴァイオリンのための作品全集

●チャイコフスキー
ゆううつなセレナード作品26
ワルツ・スケルツォ作品34
ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品35
なつかしい土地の思い出作品42
カリン・アダム(ヴァイオリン)
デイヴィッド・シャローン指揮東京交響楽団
ドリス・アダム(ピアノ)
[CD]32CM-103 ¥3,008(税込)
絶賛発売中

今秋来日決定!

ウィーンの美人姉妹コンビ、カリン&ドリスの名演CD

CD各1枚 ¥3,008(税込) 絶賛発売中



ベートーヴェン: クワイゼル& スプリング

ヴァイオリン・ソナタ第5番
〜長調作品24「春」/
ヴァイオリン・ソナタ第9番
イ長調作品47「クワイゼル」
●32CM-266



シューベルト: ヴァイオリンとピアノ のための作品集

ロンド ロ短調D.895/
幻想曲ハ長調D.934/
ヴァイオリン・ソナタ
イ長調D.574
●32CM-244



ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ 全集

第1番ハ長調作品78「雨の歌」
第2番イ長調作品100/
第3番ニ短調作品108
●32CM-220



「ウィーン奇想曲」 クライスラー名曲集

愛の喜び/愛の悲しみ/
中国の太鼓/美しきロスマリン
ほか
●32CM-121

10/21発売予定
R.シュトラウス:ヴァイオリン・
ソナタ変ハ長調作品18
フランク:ヴァイオリン・
ソナタイ長調 ほか
○32CM-213

カリン・アダム(ヴァイオリン) ドリス・アダム(ピアノ)

ウィーンの妖精ドリスの
ソロ・アルバム!



シューベルト小品集

即興曲D.899/楽典の時D.780
ドリス・アダム(ピアノ)
●32CM-122

10/21発売予定

シューマン:
ピアノ・ソナタ第1番嬰ハ短調作品11
ダヴィッド同盟舞曲作品6
○32CM-287

チケット発売中

カリン・アダム ヴァイオリン・リサイタル

ピアノ:ドリス・アダム

ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ第5番〜長調作品24「春」
シューベルト:幻想曲ハ長調D.934
トゥーラウアー:ヴァイオリン・ソナタ
ラヴェル:ヴァイオリン・ソナタ
ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ第3番ニ短調作品108

1993年10月20日(水) 19:00

東京文化会館(小)

全席指定 ¥4,500(税込)
お問い合わせ:カメラータ・トウキョウ

CAMERA TA
カメラータ・トウキョウ

〒150 東京都渋谷区神宮前5-50-6 青山テネックス8F ☎03-3498-5890 FAX.03-3498-6239

ベルリンの聴衆に感謝！

——新交響楽団ベルリン芸術週間演奏会を振り返って

ベルリンに着いてみると、そこはすでに初冬の趣であった。この風土も文化も異なる地で日本を代表する現代音楽作品を演奏する。しかも43回目を数える歴史を持つベルリン芸術週間への日本のオーケストラとして初の出演である。もちろんアマチュアとしても初めてのことだ。

この芸術週間は毎年ひとつのテーマを定めて行われており、今年のテーマは「日本」である。まさに我々は芸術週間が提唱する「東と西の音楽の架け橋」として参加することになる。

本番前日と当日にステージでリハーサルすることができた。ここは世界に冠たるベルリン・フィルの本拠地であり、多くの演奏家にとっての憧れの舞台。何人かのメンバーは学生時代にこのホールで演奏し

た経験を持っているものの、大部分の団員にとっては初めてのホールである。

9月7日午後8時、本番である。ステージに足を踏み出し、客席を見渡せば、ほぼ半数近くの客席が埋まっていた。これはあとで聞いたことだが、現代音楽をテーマとするコンサートでこれだけの聴衆が集まるのは珍しいとのことだ。わずか50人だったこともあるという。当地ではまったく無名の我々にしては上出来すぎるかもしれない。それならばなおさら、この日の聴衆の現代音楽に対する造詣と関心の深さがうかがえ、身が引き締まる。

第1曲目、藤田正典氏による新響委嘱作品「サムサラ(輪廻)」の世界初演。ともすれば緊張に震えそうになるオーケストラだが、ホールの音響の良さと、曲のもつ美しい音色と構造に、その緊張感がうまく反映されてか、思いのほか好演となったようだ。少なくとも新響としてはそれまでのリハーサルよりよりはるかに良い出来映えだった。臨席していた藤田氏は客席より盛んな暖かい拍手を浴びていた。

続く「ラウダ・コンチェルタータ」は我々が最も得意とする作曲家のひとり、伊福部昭氏の作品である。マリンバ・ソロの安倍圭子さんの踊るような、そして渾身のマレットさばきにつれてオーケストラもしだいに高揚していく。安倍さんの音色はときに激しく、ときにこの世のものとは思えぬほど美しく、変幻自在である。曲が終わると、客席からはブラボーの声がいくつともなく上がり、多くの聴衆は立ち上がって惜しめない喝采をおくってくれた。

休憩をはさんで最後の曲は、昨年4月の第135回演奏会でも取り上げた石井真木氏作曲の交響三連作「浮游する風」の欧州初演である。この曲の主役は打楽器であり、今回はソリストの山口恭範氏をはじめ、ベルリン・パーカッション・アンサンブルのメンバーがこの役を担当した。石井氏自身のタクトにより、雷鳴のような打楽器の音が炸裂し、かと思えば微かな音の震動が風のようにホールを渡っていく。後半部では楽器であると同時に前衛彫刻作品である鉄製打楽器シデロ・イホスの幻妙な響き合いが

「浮游する風」のリハーサル風景。9月7日、フィルハーモニーにて。



ベルリン・パーカッション・アンサンブル(同上)

滝澤 亮
(ベルリン演奏旅行マネージャー)

独特な雰囲気醸し出す。オーケストラもコンサートの終盤に向けて神経を集中させてゆく。山口氏による最後の“風の音”がホールを吹き抜け、しばしの凝縮された沈黙が終わると、会場は割れんばかりの拍手と熱気に包まれた。

たび重なる拍手に応え、さらにアンコールとして石井眞木氏の「秋のヴァリアンテ」を演奏して我々のベルリンでのコンサートは幕を閉じた。

演奏会を振り返ってみて何よりも心に残ったものは、ベルリンの聴衆の暖かい反応である。音楽に共感し、音楽家を育む意識を強烈に持った人々が当夜の聴衆を構成していたように思う。演奏会の成功を喜ぶとともに、このすばらしい聴衆に感謝したい。

そして最後に、今回の我々の演奏旅行にご支援、

ご協力下さった多くの方々に心からお礼を申し上げます、拙文をもってご報告とさせていただきます。



本番当日のリハーサルを終えて。ステージ裏はゆったりと食事がとれる。

PREMIER PERCUSSION

今、パーカッションの主流に!!

プレミア・ティンパニ

●広い音域(一台で最高1オクターブ可能)。●オーケストラにより溶け込む音質。●ペダルと連動の本格的チューニングゲージ付。●ヨーロッパのバンドの80%で愛用されている、長い伝統と実績。●スムーズなペダル操作。●微調整の出来るチューニングヒール。●ヘッド面の角度を自由に調整出来るキャスト付。



JPC、KMK、プレミア、マイクバルター、
ソナードラム製品

日本発売元

ジャパン・パーカッション・センター

〒111 東京都台東区西浅草1-7-1 コマキビル6F
TEL.03-3845-3041(代)

Festwochenspiegel

Windharfe, Pinselstrich, Zen

Japanische Musik mit Maki Ishii und der New Symphony Tokyo

Anbrandende Wellen sind für das Inselvolk der Japaner ein Naturereignis, das zu allen Zeiten und in allen Künsten immer wieder Niederschlag gefunden hat. In der Malerei gibt es hochberühmte Beispiele, und auch der Duktus der Musik lebt von diesem Bild der ewig anrollenden, nie beginnenden, nie endenden Bewegung. Auch im Zen-Buddhismus wird das Leben als Folge unendlicher Zyklen gesehen, deren Anfang und Ende im Dunkel verschwinden.

Scharf unterschieden davon der europäischen Musikbegriff: die Bewegung muß zu einem Ziel eilen, sich auf eine höhere Ebene stemmen. Das bewirkt die Funktionsharmonik, die jede Dissonanz zur Auflösung treibt und von der Ebene der einen Tonart unweigerlich auf die nächste einer anderen strebt. In der fernöstlichen Musik ist eine Dissonanz einfach nur ein Farbvalueur. Und die kaiserlich-japanische Gagaku-Musik ist nichts als stillstehende Zeit, sanft klingende Ewigkeit.

Die Berührung der japanischen Musik mit der europäischen und amerikanischen Moderne, die zuerst den Zwang der Tonalität und dann auch den Trieb zu immer neuen Zielen verlor, ist deshalb ganz problemlos. Im Festwochenkonzert des Tokioer New Symphony Orchestra waren drei verschiedene Arten der Begegnung fernöstlicher mit europäischer Musik zu erleben. Drei Komponisten, drei Generationen. Akira Ifukube wurde 1914 geboren und brachte sich seine Kenntnis der europäischen Musik und ihres Instrumentariums selber bei. Seine Zeit als Hofbeamter in einem isolierten Dorf von Hokkaido nutzte er zum Studium der Musik der Ureinwohner dieser nördlichen Insel, der Ainu. Es ist daher kein Zufall, wenn sein rhapsodischer Lobgesang „Lauda Concertata“ die Elegie Rachmaninows mit der rhythmischen Attacke Bartóks verband.

Die bedeutende Schlagzeugerin Keiko Abe war die Solistin an der Marimba – tänzerisch, hochvirtuos, poetisch. Nichts hatte ihr Marimbaspiel von südamerikanischer Rhythmik, mit harten Strichen zog sie Konturen durch die Klangwolken der Streicher, in zwei Kadenzen führte sie die

Musik erst in ruhigere Fahrwasser, dann in die Rasanzen des Schlußabschnitts, dessen Motorik und Dissonanzfreudigkeit von einem Posaunenostinato grundiert war.

Diesem Stück aus dem Jahr 1976 war die Uraufführung von Masanori Fujita vorausgegangen, der 1946 geboren wurde: „Samsara“ bezieht seinen Titel aus dem Sanskrit-Wort für Seelenwanderung. Irsierende Klänge, durchwebt mit harten Schlägen lassen musikalische Wellen an eine imaginäre Toteninsel schlagen. Beräuschende Klangfantasie, in minimalistischen Klangmustern perlend, läßt erkennen, daß der Komponist vor den Stufen der Illusionen, die er nach seiner Sicht der Welt noch zu überwinden hat, nicht sehr große Furcht, sondern eher die Hoffnung auch künftige Vergnügungen hat.

In der zweiten Konzerthälfte dirigierte Maki Ishii dann ein eigenes Werk, den dreiteiligen Zyklus „Floating Wind“ aus den späten achtziger Jahren. In Berlin ist Ishii kein Unbekannter. Er studierte hier bei Boris Blacher und Josef Rufer an der Musikhochschule und kehrte 1962 nach Japan zurück, wo er für die Moderne prägend wirkte. Das erste Stück „Gareil“ (Die spirituelle Kraft des Gagaku) führt den Hörer aus dem tosenden Chaos in illusionäre alljapanische Intonationen und in sich wiegende Felder von Streicher- und Holzblaserklangen, bevor das Chaos zurückkehrt.

Das zweite Stück „Fu Shi“ (Gestalt des Windes) ist im Grunde die auskomponierte Erscheinung der Windharfe. Ihr Klingen und Klingeln wandert von der riesigen Schlagzeugarmee (Berlin Percussion) in die übrigen Orchesterteile und verbreitert dort ihr Rauschen wie ihre Schläge. Aufregend dann das seltene Instrumentarium des Solo-Schlagzeugers im dritten Stück „Saidoki“ (Dämon). Yasunori Yamaguchi erzeugte mit einer Harle aus Stahlstäben, aus Blechdosen, Drahtseilen und Schellengürteln einen Klangzauber, der von guten Drachen sein mußte. Das Orchester folgte Maki Ishii bei allen Programmteilen engagiert und virtuos. Der Beifall war stürmisch und forderte noch eine Zugabe heraus.

BERND FEUCHTNER

ル的なモデル音型をキラキラと輝かせた、魅惑的なものであった。それは、この作曲家が、彼の世界観によれば克服されるべき幾段階ものイリュージョンをさほど恐れてはおらず、むしろ希望と将来に向かっての喜びと解していることを認識させた。(中略)オーケストラは石井眞木に、どの曲でも積極的かつヴィルトゥオーズの的に従った。嵐のような喝采が、さらに1曲のアンコールを演奏者に求めた。

ベルント・フォイトナー(デア・ターゲスシュピーゲル 9月9日付)

新 交響楽団の音楽家たちに、プロはひとりもない。それだけに驚かされるのは、このオーケストラの質の高さである。彼らは、この夜のもっとも要求度の高い作品であった石井眞木の《浮遊する風》のむずかしいスコアを、苦もなく演奏してみせた。石井の音楽は、やさしい響きと耳をつんざくような強音の恍惚とした爆発とがじかに隣り合う、極端から極端への音楽である。しかし忍耐の限界と思われる時でさえ、聴き手はこの音楽の官能性と響

Berliner Zeitung – Nr. 211

Donnerstag, 9. September 1993 27

Gesang der Trommeln

Das New Symphony Orchestra Tokyo in der Philharmonie



Zuerst dringt nur ein leises Klingeln ans Ohr. Dann ziehen Klangschwaden am Hörer vorbei durch die Philharmonie, werden auf und abgeblendet – bis sich in das langsame Fließen allmählich punktierte Bläserrhythmen drängen und Unruhe verbreiten. Sind dies die „Welten der Illusion“, von denen der 47jährige Komponist Masanori Fujita in bezug auf sein neues Orchesterwerk „Samsara“ spricht? Der philosophische Hintergrund japanischer Kunst ist für Europäer oft fremdartig, und das gilt auch für die drei Werke, die das New Symphony Orchestra Tokyo unter der Leitung von Maki Ishii im Rahmen der Festwochen vorstellte. Am wenigsten trifft dies noch auf „Lauda Concertata“ für Marimbaphon und Orchester von Akira Ifukube zu.

Nur vier Konzerte jährlich geben die Musiker des New Symphony Orchestra Tokyo, die allesamt keine Profis sind. Um so erstaunlicher ist die Qualität dieses Orchesters, das auch mit so schwierigen Partituren wie Maki Ishiis „Floating Wind“, dem anspruchsvollsten Werk des Abends, keine Probleme hat. Ishii,

seit langem auch in Berlin zu Hause, schuf eine Musik der Extreme, die zarte Töne unmittelbar neben ekstatische Ausbrüche von ohrenbetäubender Lautstärke setzt. Aber selbst an der Schmerzgrenze wird der Hörer von der Sinnlichkeit dieser Musik und der Klangvielfalt schier bezirzt.

Vor allem versteht es Ishii, dem Schlagzeug Melodien zu entlocken, auf Trommeln zu singen. Die fünf Schlagzeuger des Ensembles „Berlin Percussion“ erzeugen auf ihren instrumentellen Klängen, die elektronischer Musik der 60er Jahre zum Verwechseln ähnlich sind. Und der Solist Yasunori Yamaguchi beherrscht auf zahllosen Instrumenten alle nur denkbaren Spielarten von harten, schmerzenden Schlägen bis zu den leise schwebenden Tönen des „Cidelo Ihos“.

Rainer Pöllmann

FESTWOCHENTIP

■ 9. 9., 20.30 Uhr: Philharmonie

Das Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks spielt unter Lorin Maazel Werke von Johannes Brahms.

新 交響楽団のコンサートでは、極東の音楽とヨーロッパの音楽の出会いの3つの異なる形を体験することができた。世代を異にする3人の作曲家の作品が演奏されたからである。(中略)1914年生まれの伊福部昭のラプソディックな讃歌《ラウダ・コンチェルタータ》は、ラフマニノフのエレジーを、バルトークのリズミ的アタックと結び付けたものであった。1946年生まれの藤田正典の《サムサラ》は、魂の輪廻を意味するサンスクリット語からタイトルをとっている。その響きのファンタジーは、ミニマ

Fernöstliche Seelenwanderung

New Symphony Orchestra Tokyo mit
Walerij Afanassiew in der Philharmonie

Für eine noch nicht erschienene Publikation wird geworben: „Die Musik Maki Ishis. Schöpfung aus zwei Musikwelten.“ In der Tat, der 1936 Geborene hat ab 1958 bei Boris Blacher in Berlin Komposition studiert, kam 1962 mit Stipendium des Deutschen Akademischen Austauschdienstes erneut hierher, pendelt zwischen Berlin und Tokio als Musikorganisator. Das färbt auf die eigenen Kompositionen ab. „Floating Wind“ (1989/92) bricht mit einem gigantischen Schlagzeug-Getöse los, bringt Blech-Klangballungen, bis sich Lyrisches durchsetzt.

Der Komponist selbst stand bei der Aufführung in der Berliner Philharmonie am Pult; er kam mit „seinem“ New Symphony Orchestra Tokyo. Durch ihn wurde der 1956 gegründete Klangkörper befähigt, moderne Partituren zu spielen. Erstaunlich, denn es handelt sich um ein Ensemble im Amateurstatus. Hier wähnt man Profis der Neuen Musik am Werke.

Die kann auch recht unterhaltsam sein. Das zeigt „Lauda Concertata“ (1976) von Akira Ifukube. Da ist die Marimbaphonistin Keiko Abe ganz in ihrem Element. Ungemein virtuos handhabt sie die vier Schle-

gel. Auch im hauchfeinen Pianissimo wird gespielt, sekundiert von Streicher-Singen. Folkloristische Elemente fehlen nicht. Harfe und Marimbaphon gehen zusammen.

Und sogar eine Uraufführung war dabei und der entsprechende Komponist. Er wurde gefeiert für seine erst dieses Jahr komponierte „Samsara“ (Seelenwanderung). Die geht mit einem musikalischen Wellengang einher. Schlagwerk kommt auch hier groß heraus, ein Marimbaphon inmitten des Orchesters einbezogen. Ein Fünfzehn-Minuten-Werk von Masanori Fujita (geb. 1946) voller Eindringlichkeit und Farbigkeit.

Im Nachbarhaus begann indes der Walerij Afanassiew im Kammermusiksaal Schuberts A-Dur-Sonate zu interpretieren. Wieviel Zartheit, liedhafte Schlichtheit, welche Virtuosität und zugleich: wieviel analytisches Spiel, Strukturen deutlich machend und auch Stimmungen, Befindlichkeiten. Ein Bankrott, in den sich versöhnliche Töne mischen. Afanassiew ist ein brillanter Klaviertechniker, ein unkonventioneller Gestalter, ja so etwas wie ein Philosoph oder auch Literat. Jener kennt keine Glätte. *Werner Schönsee*

によって現代音楽のスコアを演奏する能力を獲得した。アンサンブルがアマチュアであることを考えると、その能力は驚くほど高い。現代音楽のプロが演奏していたと言ってもさしつかえない。

楽しかったのは、伊福部昭の《ラウダ・コンチェルタータ》(1976)。ここではマリンバの独奏者、安倍圭子が本領を発揮した。稀にみる技術で、彼女は4つのばちを操って見せた。彼女の演奏には細やかな息づかいのピアノシモがあり、弦楽器を思わせる歌があった。民族的な色彩も、そこには欠けていなかった。ヴェルナー・シェンゼー (ノイエ・ツァイト 9月9日付)

競 い合いも華やかに、喜ばしい響きで、時には耳を聳するばかりに……。だがそれはほとんどいつも面白く、刺激的だった。新交響楽団が、日本の現代音楽によって、フィルハーモニーにおけるベルリン芸術週間に客演。しかも、漂うような響きの特徴とする管弦楽曲《サムサラ》の初演が含まれていた。当夜のもっとも成功した作品は、長さの点でも最高だった石井真木の交響的連作《浮游する風》であった。日本の響きの要素とヨーロッパの構造がここでは説得力をもって結びつけられており、時として疾風が、オーケストラを貫いて吹き過ぎるように思われた。(中略) オーケストラはヴィルトゥオーゾ的であり、正確であった。これがアマチュア・オーケストラであるとは、信じられない。いずれにせよ彼らは、全員がプロであるかのように演奏していた。 H.P.M. (B・Z紙 9月9日付)

きの多様性に、すっかり魅了されていた。何より石井は、打楽器から旋律を引き出し、太鼓を歌わせるすべを知っている。独奏者山口恭範は、固い痛から《シデロ・イホス》のかすかに漂う

ようなトーンに至るまで、考えうる限りの奏法を数知れぬ楽器で展開した。

ライナー・ペルマン (ベルリーナー・ツァイトウング 9月9日付)

浮 游する風では、作曲家自身が指揮台に立った。石井は、「彼の」新交響楽団とともにやってきた。1956年に創設されたこの楽団は、彼

Ein Hurrikan fegt durchs Orchester

Zu Gast bei den Festwochen: Das „New Symphony Orchestra Tokyo“ in der Philharmonie

Konzertant, klangfreudig, oft auch ohrenbetäubend – aber fast immer interessant und anregend: Das „New Symphony Orchestra Tokyo“ gastiert bei den Festwochen in der Philharmonie. Mit neuer Musik aus dem eigenen Lande. Ein von schwebenden Klängen bestimmtes Orchesterstück „Samsara“ sogar als Uraufführung. Der

symphonische Zyklus „Floating Wind“ war das längste und auch gelungenste Werk. Japanische Klangelemente und europäische Strukturen werden überzeugend miteinander verbunden, ein enges Netz geknüpft, das allen Anstürmen des Orchesterapparates standhält. Darin ein Mittelteil, der die „Gestalt des Windes“ beschreibt. Von

säuselnd und sanft bis stürmisch. Ein Hurrikan scheint gelegentlich durch das Orchester zu fegen. Dieses selbst wie eine Insel im Sonnenlicht. Ein Spektakel für Augen und Ohren. Doch gelegentlich wirkt alles zu lang. Japanische Musik hat offenbar auch ein anderes Timing. Doch Maki Ishii am Pult hielt alles bestens zusammen. Er ist

nicht nur Dirigent, sondern auch Komponist des „Wind“-Werkes. Das Orchester virtuos und präzise. Kaum zu glauben, daß die „Neuen Sinfoniker“ ein Amateur-Orchester sein sollen? Sie spielten jedenfalls wie hundertprozentige Profis. H.P.M.



ベルリン演奏旅行参加記

クラシック音楽を愛する者にとって、特にオーケストラを20年近くやってきた私には、あのベルリンフィルの本拠地で、しかもこのベルリン芸術週間40数年の歴史のなかでアマチュアオーケストラが出演するのは初めてという栄誉のもとで演奏できることは、二度とない機会であり逃がせるものではなかった。去年、このベルリンの招待を受けるかどうか、新響の総会でもめた。その時「何のために行くのか？」という疑問に「それは、自分の恋人を何のために愛するのかと聞くようなものだ。そこへ行って演奏したい。それだけだ」というある団員の一言で参加が決定したように思う。

このような熱い想いをたずさえて、ベルリン・テーゲル空港に降りたった私たちだったが、はやくも観光客としての興奮と好奇心ではしゃいでいた。翌朝から早速市内観光。旧西ベルリンは、ほとんど戦後の建物であって東京とあまり変らない。が、東西ドイツ統一後の治安の悪さは日々増して、一人で歩くな、夜の地下鉄はダメ、国鉄はもっとダメ、「日本人だ」とはつきり言え（外国人労働者は襲われやすい）など、さんざん脅かされた。そこで昼間の地下鉄で、旧東ベルリンへ足を踏み入れた途端、40年以上も昔にタイムスリップしたかのようなだった。建物の壁は殆ど戦前のままで、通りの家には恐らく戦時中の銃の弾丸の跡と思われる傷が至る所にある。今のドイツのアンバランスを象徴しているかのようなだった。統一ドイツの様々な困難は、最近の日本のマスコミでもよくとり上げられているだけに、私も単なるお楽しみみだけでは歩き回れない思いがした。

翌日、リハーサルのためにいよいよベルリン・フィルハーモニー・ホールへ。そこは、古典的ヨーロッパの雰囲気とは程遠く近代的な建物で、あのサントリーホール

はここを真似て造られたといわれている。ステージを囲んだ客席と壮大なパイプオルガン、そして食事もできる舞台裏。「どんな音が響くのかしら？」と、その晩のベルリンフィルの演奏会を楽しみにする。

その夜、新響の半分以上のメンバーが、アバド指揮ベルリンフィル、ラフマニノフのピアノコンチェルト3番とチャイコフスキーの「悲愴」を聞いた。わたしは、……トリハダがたった（ああ、なんて語彙の貧しい私）。そして不覚にも「明晩の私たちのコンサートに、今夜と同じお客様がいらしたらどうしよう」と思ってしまった。とにかく凄い。ベルリンフィルが上手なのは当たり前だが、あの気迫、あのエネルギー。演奏会とはこうやってやるんだと言わんばかりであった。

私たちは日本の現代作曲家の曲を演奏しにきた。そして何を伝えようとしているのだろう。ベルリンフィルの演奏で、また別の夜に聞いたワーグナーのオペラで、私は西洋の音楽をきいたのだと実感した。音楽家達のあの集中力とエネルギー、5時間以上歌い続けても衰えをみせない輝くような声のオペラ歌手達、その歌手には惜しめないブラボーを送りながら、ちょっと調子の悪かった演奏者たちにはブーイングを臆せず鳴らす聴衆の質の高さ。このような国で私たちも何かを伝えてみたいと心から思った。

翌日、夕べの興奮も冷めないまま、新響は多分この曲目を練習してきた中で、最も集中力のあるいい演奏をした、と思う。そして聴衆の暖かい拍手の嵐に、ほっと胸をなで下ろしたのだった。

ベルリン、伝え合う素晴らしさと重さを実感した旅だった。
日高美加（チェロ）



祝・ベルリン芸術週間参加



CD・ビデオ・楽器・楽譜

オデオン堂

本店(豊岡通り)	☎571-3621	10:00~21:30 (自・祭日20:00)
カミン店(駅ビル5F)	☎511-9739	10:00~20:00
フーガ店(西友5F)	☎583-3585	10:00~19:30

ベルリンの国立図書館の自筆楽譜

ウンター・デン・リンデンに面したプロイセン国立図書館には、ドイツ国内の手稿本や美術書などの貴重なコレクションが集められていた。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンといった有名な作曲家たちの自筆楽譜もそのひとつである。第2次大戦が始まると、これらのコレクションは戦禍を逃れていくつかの地方に分散して疎開することになった。そして数百の本箱に丁重に詰められた自筆楽譜のとりわけ貴重な一群が落着いた先は、南シレジアの町グリュッサウにある修道院であった。

南シレジアは戦後ポーランド領となり、自筆楽譜は長い間行方不明のままだった。戦火で燃え尽きたとか、ソ連軍が持ち去ったとか、さまざまうわさが飛びかった。しかし実際には、これらの自筆楽譜はポーランド南部の古都クラクフにあるヤギェウォ大学の図書館に秘密裡に保管されていたのである。

1977年になってポーランドと東独の間にすこし歩み寄りがあり、自筆楽譜のごく一部が返還された。モーツァルトの「魔笛」全曲、ベートーヴェンの「第九交響曲」、バッハの「フルートソナタ」など7曲である。そしてこれ以外の楽譜については、ヤギェウォ大学図書館において研究者の利用に自由に供されるようになった。

以上はナイジェル・ルイス著「ペーパーチェイス」の粗筋である。この本は1981年にロンドンで出版され、私が白水社の翻訳を読んだのが1986年、そしてベルリンの壁が崩れたのが1989年。東欧に変革の嵐が吹荒れて以来、私は自筆楽譜の行方がずっと気になっていた。体制が替って楽譜は返還されたのだろうか、それとも混乱の中でさらに行方不明になってしまっていないだろうか……。

この9月にベルリンを訪れた際、スケジュールの合間をぬって国立図書館：プロイセン文化財図書館（Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz）に行ってみた。ドイツ統一後東西ベルリンの国立図書館は組織上合併したが、建物はウンター・デン・リンデンのハウス1（プロイセン国立図書館→ドイツ国立図書館：東独）と、旧西ベルリンのハウス2（1978～）に分かれている。私が訪れたのは、私たちの演奏会の会場であるフィルハーモニーザールのすぐ隣にあり、フィルハーモニーと同じ建築家が設計したモダンな造りのハウス2。そこで手に入れた1992年の展示会パンフレットには、「ペーパーチェイス」と同じ事柄がそっくり書かれていた。つまり現在でも楽譜は返還されず、ヤギェウォ大学に置かれている、という訳である。そして東欧の政情が安定してくれば、楽譜は返ってくるだろうという期待が記されていた。

翌日、ウンター・デン・リンデンのハウス1に行ってみた。あいにく館内整理の特別休館日で中には入れなかったが、歴史がぎっしり詰った重厚な建物の中庭で、静かなひとときをすごすことができた。蔭のからまる建物の壁を眺めながら、戦争に翻弄された図書館と図書館員、そしてコレクションの行方に思いをめぐらせた。

門倉百合子（ヴィオラ）

《祝・ベルリン芸術週間参加》

電子楽器からオーケストラまで。楽器輸送のエキスパートです。

田中陸運(株)

〒151東京都渋谷区代々木4-60-10 ☎03(3370)6275

ご寄付・助成・協賛広告・ご協力をいただいた方

●個人からのご寄付

相原 素子
青木 朗
秋野 悦子
秋山 俊樹
東 節子
阿仁屋節雄
荒木 昇
安齋 博美
飯田 睦美
伊賀 健一
池田 伸一
石田 信浩
石原 充子
泉 純
市川 玲子
井出 正威
伊藤 昭子
伊藤 次朗
伊藤 伸行
伊藤 秀實
伊藤 雅
稲葉 瑞子
稲葉 ふみ
伊野 裕
伊能 博
井上いそ子
井上 雅雄
今井 誠一
今井 康弘
今井 昌子
内田 明
内山 裕子
宇野 勉
梅澤 宣雄
楳田 恵造
江尻 公一
江原 明子
江原
遠藤 英毅
生山 兼二
大久保佳介
大谷 安子
大塚千代子

大塚 照男
大槻 俊雄
大原 久治
大原都美子
大柳千佳子
大和田 正
尾形あい子
尾形 素臣
岡藤
奥田 エミ
奥野龍太郎
長田 一美
長田美智子
押田 修
落合 典子
小野 俊雄
風間 茂彦
加藤 徹
加藤 紀久
加藤 博子
加藤 正之
門垣 恒明
門倉新之助
金田 淑子
釜田 富美
鎌田 誠一
河 浩司
川井 茂
川井千恵子
川口 妙子
河津 珠江
川辺 靖
河村 洋三
神納木清子
菊地 文
菊池 正樹
岸野 尚
橘谷 静子
橘谷恵美子
木下れい子
工藤 真紀
久芳 素子
久保勇太郎
窪川 成生

熊井 昭彦
熊坂 公子
公文 寿子
倉金 忠
栗原 憲吉
黒沼 清
小坪 洋
小池 正剛
郷 葉子
後閑 博史
小崎けい子
小菅 治彦
小長谷孝江
小林 昭夫
小林 久子
駒井 明喜
古谷野道子
斎藤 貫一
斎藤 茂樹
斎藤 伸一
斎藤みち子
斎藤 光江
斎藤 靖子
三枝真知子
酒井 忠雄
坂井 吉彦
坂森 彰雄
佐久間厳二
桜井 キミ
桜井優離呼
佐々木和夫
佐々木洋一
左治木 勉
定方きよ子
佐藤 一雄
佐藤 達夫
佐藤 洋
佐藤みち子
佐藤 洋子
佐藤 良子
澤村 英俊
椎名 富子
シーパート・ジョセフ
塩田 説子

篠崎 功子
篠崎 史子
島田 清純
清水 龍雄
志村 浩
志村 康宏
志村 玲子
下原 薫
下山 泉
末永 恵子
菅原 健次
須佐美洋二
鈴木 忠夫
鈴木千世子
関 建次郎
関 敏夫
関 ユミ子
関田 和行
関戸 嘉光
曾田五月也
曾根川はるみ
高木 慶三
高田 友良
高取 隆喜
高橋 厚子
高桑 栄子
高桑 茂
高桑 麗子
高橋 教子
高橋 俊光
高橋 秀幸
高橋 マリ
高橋 康文
高柳 栄子
高山佐代子
たぐすみこ
武田高之助
田中 紀夫
田中 勇次
田中 義吉
俵 里英子
塚越二喜男
塚田 則彦
都河 明子

都河 果絵
津田 治樹
土田英三郎
堤 嘉延
恒吉八州男
寺崎 志野
寺沢 美紀
富樫 康
常盤 哲夫
戸田 昌広
富重 正樹
富田 久子
富田 博
内藤 政徳
中川 自通
中尾 恒彦
長尾恵美子
長尾 豊
中島あや子
長澤 秀子
長島 和子
永嶋末年男
中條 忍
永田 雅夫
なかにしさとひこ
中林二三得
中村 一郎
中村 章吉
中村 宏
中村美穂子
中村悠紀博
中村 良一
夏田 昌和
奈良 弘三
奈良 祐司
にいづまひろし
西野喜久子
西野 博子
西村真由美
根本 哲夫
野口 昌徳
野瀬 隆子
野田 俊也
野村 啓子

橋本 純一
長谷部宏行
馬場 玲子
羽部 玲子
浜田 祐子
林 安頼
原 武子
菱沼 佳史
平田 進
平野 明子
平野喜代重
平野不二子
笛木 学
笛木百合子
深澤か免代
福本美和子
藤井いと子
藤井 澄子
藤本潤一郎
藤原 満
古田 慎二
堀川 博司
本多 宏子
前田けい子
前田 実
真喜志 卓
幕田 圭一
幕田由美子
松井 和子
松岡守美子
松島 光代
松蘭 とよ
松田佐和子
松実 俊子
三浦 和三
三浦 秀雄
水谷 一美
三葉 洋子
三宅 良彦
宮武 正哉
宮原 映子
村井 潔三
村井 弥生
村田 益男

村手 潤之
村西 洋三
森 喬
森 しづ江
森山 崇
柳沢 満子
山内 建
山崎 知道
山崎 信子
山崎 藤衛
山田 滋
山田 敏男
山田 恭恵
山田 洋子
山根 三郎
山本 喜美
弓削 弘子
吉岡健一郎
吉田 清見
吉田 慎二
吉田創之助
吉田 輝夫
吉野みづえ
吉村 高子
和田 一郎
和田 裕
渡辺 朝雄
渡辺さち子
渡辺千鶴子
匿名希望
匿名希望
匿名希望
匿名希望
匿名希望
匿名希望
匿名希望
桜井 俊彦
佐藤 道子

1993年9月30日現在
五十音順、敬称略

●法人・団体からのご寄付

㈱AVTS有志
アルファコミュニティ 高橋利夫
大谷櫻井鉄工
オカベテック
川田工業 森口啓二
㈱コモンセンス社長 福本正
スタッド協会
ダイヘンスタッド

日清製油㈱食油部、食品部、人
事部、情報システム室電算課、
東京支店、神静支店、金沢営
業所、京都営業所、大阪事業
場、神戸営業所、和歌山営業
所、高松営業所
日清ビジネスアシスト㈱、同川
崎オフィス女子一同
日本スタッドウエルディング

日本ドライブイット

㈱藤井工業
フォルム画廊
プロフェッショナル・パーカッ
ション
松伏町文化振興事業団
武蔵産業㈱
●助成 (五十音順)
㈱花王芸術文化財団

サントリー㈱文化事業部

㈱日商岩井国際交流財団
日本交通公社
㈱放送文化基金
㈱ローム ミュージック フアン
テーション

●協賛広告 (五十音順)

㈱アプアプ赤札堂

オデオン堂
カメラータ・トウキョウ
(株)コンサートサービス
三映印刷(株)
ジャパン・パーカッション・セ
ンター
田中陸運(株)
テレビマンユニオン
(株)日新写植
日新製糖(株)
日本エス・シー・アール(株)
(株)リコー

●独奏者

マリンバ：安倍圭子
打楽器ソロ：山口恭範
打楽器ソロ(オーケストラ中)：
ベルリン・パーカッション・ア
ンサンブル
クラウド・キースナー(ベルリ
ン・ドイツオペラ)
佐野恭一(桐朋学園大学助教
授、元ベルリン・ドイツオ

ペラ)
アンドレアス・ハーゼ(ウンタ
ー・デン・リンデン国立歌
劇場管弦楽団)
ゲーファン・シャープ(コミッ
シェ・オパー・ベルリン)
トーマス・クーン(コミッ
ェ・オパー・ベルリン)

●賛助出演

ハープ：早川利佐子
チェレスタ：石川恵美
ヴィオラ：瀬尾 麗、志村 翠
チェロ：岩本忠生、都河明子

●楽器提供・輸送(五十音順・敬称略)

石井真木(作曲家・指揮者)
岩本忠生(ダルムシュタット・オ
ペラ)
ハンス・ヨヘン・ウルリヒ(ベル
リン・ドイツ・オペラ)
河内秀夫(バンベルク交響楽団)
佐野恭一(桐朋学園大学助教授、

元ベルリン・ドイツ・オペラ)
田中陸運(株)
ベルリン・パーカッション・ア
ンサンブル
オトマル・ボルヴィツキー(元
ベルリン・フィル)
牧野康之
山口恭範(打楽器奏者)
ヤマハ・ヨーロッパ(ハンブル
ク)

●その他

演奏会プログラム翻訳：ロビ
ン・トンブソン
レセプション：ベルリン日独セ
ンター 生田千秋(文化部長)
通訳：中川由美子(在ベルリン・
ホルン奏者)
ステージ・セッティング：後藤
英(在ベルリン・作曲家)
宿泊：ホテル・プレジデント
旅行マネージメント：日本交通
公社

公式録音：SFB(自由ベルリ
ン放送)

ありがとうございました。

新交響楽団ベルリン演奏旅行
プロジェクトチーム

チーフ：滝沢 亮
メンバー：今尾恵介 奥平一
落合宏 門倉昭一 兼子尚美
志村努 福島龍二 村井功
柳澤秀悟 吉川具美 吉川久

Davigel

〈祝ベルリン芸術週間参加〉
海を越えてやってきた。
本場フランスの味が生きている冷凍食品です。



鴨のオレンジソース



総輸入元

日新製糖株式会社
ダビジェル食品部

〒135 東京都江東区豊洲4-9-11

☎(03)3532-9418(ダイヤルイン)

メインディッシュからデザートまで、豊富なフランス料理を
手掛けるフランス最大の冷凍食品メーカー、ダビジェル社。
日新製糖との提携によって、日本の業務用ユーザー様に
お届けできるようになりました。

RICOH

人物を撮るべきか。

夜景を撮るべきか。



それが問題でした。

どっちもキレイに撮れる 「スーパー夜景」搭載。

こんな場合、両方にピントを合わせるの一眼レフでもムズかしい問題でした。そんな難問をみごとにクリアしたのが、マイポートだけの「ツインフォーカスのスーパー夜景」。カメラが両者の距離を考え、瞬時にピントをコントロール。だからほら、だれにでもびっくりするほどキレイな「作品」がしっかり撮れるのですね。あふれんばかりの機能を「いちばんやさしく」つめこんで、新しいマイポート、ビリリとデビュー。

ちいさいズームのなかの、ちいさいズーム、新発売。

●32～64mm、スーパーミニサイズで堂々の2倍ズーム●ワンタッチ途中切り替えパノラマ●顔が暗くならない逆光自動発光&自動露出補正●フルオートストロボ●赤目軽減モード●パノラマ時でも写し込めるオートデートetc.



マイポート
ズーム 320P パノラマ

●メーカー希望小売価格(ケース込)……………48,000円(税別)

※「スーパー夜景」は、1秒のスローシャッターに設定されます。手ブレをふせぐため三脚などでカメラを固定してお撮りください。
※表記されている「パノラマ」とは、カメラ側で標準撮影の1コマ分の上下を遮光して約13×36mmの横長の映像を写し込み、プリント段階でパノラマサイズに仕上げるものです。

リコーカメラについてご意見・ご希望がございましたらこちらまでご連絡ください。

〒104 東京都中央区銀座6-14-5
株式会社リコー 光学事業部 サービスセンター内

リコーカメラお客様相談窓口



0120-007962

●受付時間 月曜から金曜/9:30～18:00 土曜/9:30～15:00
●日曜・祝日はお休みさせていただきます。

Wind, Dämon und spirituelle Kraft

Herbst-Variationen: Japanische Komponisten bei den Berliner Festwochen

Montag, 4. Oktober 1993, Nr. 230

Frankfurter Allgemeine Zeitung

Sensationellen Erfolg hatte in der Berliner Philharmonie das Konzert des „New Symphony Orchestra Tokyo“, eines seit drei Jahrzehnten bestehenden Orchesters von Enthusiasten auf hohem professionellen Niveau. Virtuos und sensibel reagierend in allen Gruppen, widmete es sich zunächst „Samsara für Orchester“ (1993) von Manzanori Fujita (1946), einem Auftragswerk der Berliner Festwochen. Der Komponist bekennt, er strebe danach, aus den sechs Welten der Illusion befreit zu werden, die das Sanskrit-Wort „Samsara“ (Seelenwanderung) charakterisiert. Und es war interessant zu erleben, wie die vierzehnmündige Komposition konzipiert wurde, die Spannung zwischen klangbetonten Feldern, vibrierenden Klangströmen, Klangschleiern und allmählich sich steigenden, raumgreifenden Akzentuierungen des Schlagzeugs und großorchestralen Entladungen gestaltet wurde. Der Beifall für den anwesenden Komponisten war überaus herzlich.

Der japanische Komponist Maki Ishii (1936), der das Konzert leitete, stellte danach sein ehrgeiziges symphonisches Projekt „Floating Wind“ vor, die zyklische Zusammenfassung der 1988/89 entstandenen Orchesterstücke Gareji (Die spirituelle Kraft des Gagaku), Fu Shi (Gestalt des Windes) und Saidoki (Dämon). Ishii, der um 1960 in Berlin bei Boris Blacher und Josef Rufer Komposition studierte, arbeitet seit Jahrzehnten an der Integration östlichen und westlichen Komponierens. Auch diesem Zyklus liegt ein ästhetisches Prinzip des Wandels zugrunde – „jo-ha-kyū“, das der No-Schauspieler und Stückeschreiber Zeami (1364 bis 1443) in einem Traktat erläutert hatte. Ishii nutzt es für die zyklische Gliederung – Gareji entspricht der jo-Sektion (Hinführung), Fu Shi der ha-Sektion

(Durchführung) und Saidoki der kyu-Sektion (Finale) –, aber auch für die Strukturierung der kompositorischen Zellen. Auffällig an Ishiis Werken ist aber weniger ihre theoretische Fundierung, sondern der besondere Klangsinn des Komponisten, der sich in einer überwältigenden Fülle von Charakteren und Klangmischungen des Schlagwerks äußert, der phosphorizzierenden Klangräume entwirft oder zu brutalen Entladungen der vielfältig besetzten Schlagzeuggruppe vorstößt. Eingewoben in die mächtigen Klangpanoramen werden dichtgearbeitete Bläserfelder, die in ihrem Non-Vibrato, ihrer gleichsam anonymen Gestik an die Gagaku-Tradition erinnern. Strukturbildend sind aber auch jene großen Steigerungsformen, die der Komponist in allen drei Sätzen aus dünnen konzentrierenden Fäden verschiedener Instrumentalgruppen allmählich aufbaut.

Mit „Floating Wind“ ist Maki Ishii ein höchst originärer zeitgenössischer Zyklus von Orchesterstücken gelungen, der sich jenseits modischer neotraditionalistischer Kategorien, wie sie kürzlich bei Toru Takemitsu zu beobachten waren, beeindruckend entfaltet. Gefährdet ist dieses Komponieren gelegentlich durch die allzu häufige Anrufung exzessiver, organisch sich verausgebender Klangentladungen, die die Form durchschneiden.

Bejubeltes Mittelstück des Konzertes wurde „Lauda Concertata“ für Orchester und Marimba (1976) von Akira Ifukube (Jahrgang 1914). Es ist eine an Filmmusik erinnernde Studie, die in ihrem furios-motivischen letzten Satz die vorzügliche Solist:in Keiko Abe zu hinreißender Virtuosität herausforderte. „Autumn-Variations“, eine ins walterselfe Wien ausschwärmende Orchesterstudie Ishiis, beendete das herzlich gefeierte Festwochenkonzert in der Berliner Philharmonie. WOLFGANG BURDE

風、鬼そして霊力

秋の変奏曲: ベルリン芸術週間の日本の作曲家

フランクフルター・アルゲマイネ紙
(1993年10月4日付)

新交響楽団のベルリン・フィルハーモニーにおけるコンサートは、センセーショナルな成功をおさめた。熱狂的でプロフェッショナルな高い水準を持ち、すべてのセクションがヴィルトゥオーソ的で敏感に反応するこのオーケストラは30年前に結成された。最初は藤田正典の《オーケストラのためのサムサーラ》を初演した。作曲者は6つのイリュージョンの世界(六道: サンスクリット語のサムサーラ/輪廻を特徴づけている)からの脱却を求めている、と告白する。そして響きの平野、揺れ動く響きの波、響きの歌、と、次第に高潮し、空間を破る打楽器のアクセント、大オーケストラの爆発、との間の緊張を持つこの曲が、14分という短さの内に構成されていたということを体験することは、興味あることであった。会場に在席した作曲者に与えられた喝采は非常に暖かいものであった。

このコンサートを指揮した日本の作曲家石井眞木は、最後に野心的な交響的プロジェクト《浮游する風》を演奏した。(中略)

石井は十年来、東西両音楽の統合という領域で作曲をしている。この交響的シリーズもまた、この美学的原則に即したものであった。(中略)

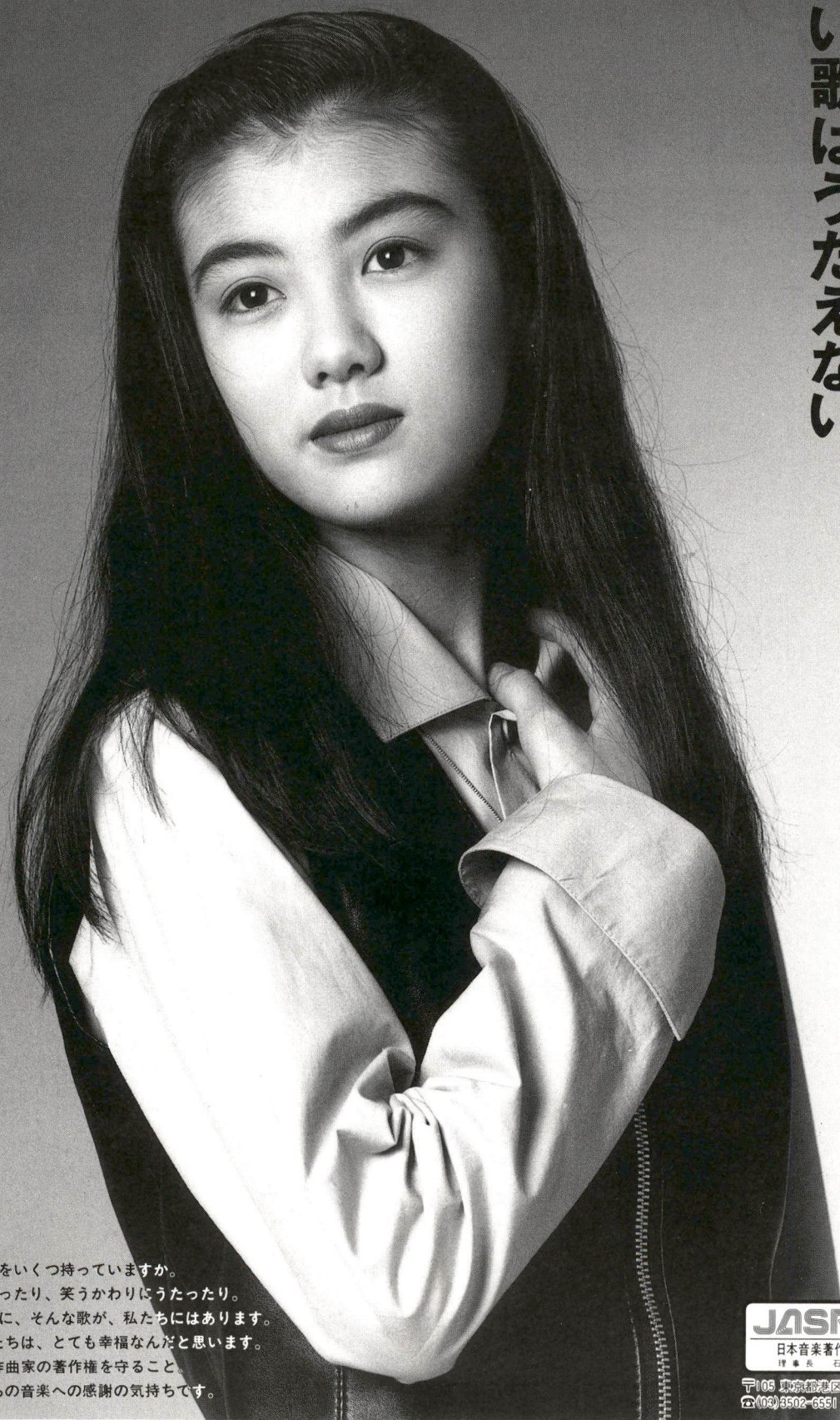
石井眞木は《浮游する風》で、最高に個性的で現代的な交響的連作に成功した。この作品は、先頃聴いた武満徹作品に認められるような、流行の新伝統的(ネオ・トラディショナル)カテゴリーの彼方に、印象深く広がるものであった。(中略)

このコンサートの中央に位置し喝采を博したのは、1914年生まれ伊福部昭の《ラウダ・コンチェルタータ》であった。何かある映画音楽を思い起こさせるような作品で、その動的な最終楽章では、優れた独奏者の安倍圭子が心を奪うような名人芸を発揮していた。ワルツの喜びのウィーンから飛び出してきたような石井のオーケストラ曲《秋のヴァリアンテ》をもって、フィルハーモニーでの心から称賛されたコンサートは終わった。

ヴォルフガング・ブルデ(Wolfgang Burde)

翻訳: 大塚 匡

いい歌がなければ、
いい歌はうたえない。



好きな歌をいくつ持っていますか。

涙のかわりにうたったり、笑うかわりにうたったり。

選んだわけでもないのに、そんな歌が、私たちにはあります。

うたえる歌を持つ私たちは、とても幸福なんだと思います。

作詞家、作曲家の著作権を守ること。

それは、私たちの音楽への感謝の気持ちです。

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長 石本 崇由起

〒106 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03) 3502-6561

T H A N K S F O R M U S I C